

論文の要約

論文名 戦後日本「メロドラマ」映画の身体
——撮影所時代のローカル・ジャンルと範例的作品

現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程5年
河野真理江

(1)目次

序論 「メロドラマ(merodorama)」再考

はじめに

1. ローカル・ジャンル
2. プロトタイプ
3. 範例的作品

おわりに

第1章 すれ違い映画—戦後日本における「メロドラマ」と大衆文化

はじめに

1. 『君の名は』の「模造品」たち
2. 映画・ラジオ・週刊誌の連携
3. ロマンティックな帝国、植民地としての異国
4. 階級論争から「通俗」言説へ

おわりに

第2章 『君の名は』三部作(1953~1954年)—欲望と道德の感傷メロドラマ

はじめに

1. 結びつきの絶対的宙吊りとしての「すれ違い」
2. 「倒れること」と「待つこと」
3. 夢と現実のパラドクス
4. 「虚脱」という現実

おわりに

第3章 文芸メロドラマ—「よろめき」の女性映画群

はじめに

1. 中間小説と文芸映画
2. 松竹女性映画の変容
3. モラル・パニックと男性観客性
4. 『妻は告白する』(1961年)

おわりに

第4章 『猟銃』(1961年)—権力と背信の「洗練された」メロドラマ

はじめに

1. 権力の表象と主題化
2. 「壺」と「銃」
3. イデオロギー的矛盾と批評言説

おわりに

第5章 リバイバル・メロドラマ—「メロドラマ」の復活と死

はじめに

1. 「メロドラマ」復活の波
2. リバイバル・メロドラマは二度死ぬ
3. ゴシップの快樂

おわりに

第6章 『続・愛染かつら』(1962年)——自己言及的でグロテスクなバックステージ・メロドラマ

はじめに

1. 再現と「アップデート」
2. バックステージ・メロドラマとして読む
3. アイロニーとしての自己言及性
4. グロテスクな「過剰」、あるいは死としての再生

おわりに

結論 メロドラマ映画の身体

はじめに

1. ジャンル・ボディー
2. 映画のなかの人のからだ
3. テクスチャーと肌理

おわりに

付録 各サブジャンルの作品一覧

1. すれ違い映画一覧
2. 文芸メロドラマ一覧
3. リバイバル・メロドラマ一覧

参考文献目録

(2)論文内容要約

本論文は、日本映画史における「メロドラマ」の形態を実証的かつ理論的に再検証することを目的としている。ここで括弧付きで語られる「メロドラマ」とは、日本映画の歴史のなかで、同時代的に「メロドラマ」と呼ばれていた批評的・産業的カテゴリーを指す。とくに1930年代から60年代を中心に、このある一定期間存在していた日本映画独自のジャンルとしての「メロドラマ」とそのサブジャンルに注目し、主題、技術とスタイル、スターと観客性、批評言説と大衆的受容等にかんする諸特徴を明らかにした。方法としては、映画ジャンル研究、映画史研究を基本的な立場としつつ、女性映画研究、受容理論、大衆文化論、ジェンダー&セクシュアリティ研究といった多角的な視点から、歴史的な検証とテキスト分析によるケース・スタディを行った。

序論では、本論文における「メロドラマ」というジャンルの捉え方を理解するうえで基礎となる、「ローカル・ジャンル」、「プロトタイプ」、「範例的作品」という三つの概念について説明した。まず、ローカル・ジャンルという概念は、映画におけるメロドラマがつねに歴史的・文化的な特殊性においてあらわれるという考えを反映するものである。従来の映画研究において、メロドラマはもっぱら普遍的あるいは標準的な解釈を追究されてきた分野であるのに対して、本論文ではこうした既存の解釈と、日本映画における同時代的なジャンルとし

での「メロドラマ」とが、歴史的・地域的に特殊であるという意味においては等しくローカルな形態であるとみなした。プロトタイプという概念は、日本映画のなかで最初に「メロドラマ」として広く一般に受容された映画群、とりわけ 30 年代の松竹女性映画を指示して用いた。プロトタイプを設定することは、その後日本映画のなかでこのジャンルがどのように多様化したかを辿るのに役立つ。範例的作品という概念は、先述したような異なるローカルなメロドラマ概念の特徴を併せ持つ作品のことを指し、異なる背景を持つメロドラマの意味と用法、あるいはその形態をめぐる不一致と相似、典型と例外、個別性と個別性とを関連づけることができる。

本論では、こうした「メロドラマ」の特質をより具体的に明らかにするために、戦後ほぼ同時期に展開された三つのローカル・ジャンルに注目した。一つ目は、「すれ違い映画」と呼ばれていた作品群で、これは『君の名は』に代表される、運命の出会いと別れを延々とくり返す大作恋愛映画を指す。同時代における最もポピュラーなメロドラマのタイプでもある。

二つ目は「文芸メロドラマ」と呼ばれていた作品群で、これは、昭和 30 年代を中心とするいわゆる「姦通小説」の映画化作品群と要約できる。

三つ目は「リバイバルもの」と呼ばれることがあった作品群である。1950 年代から 1960 年代にかけて、かつての映画作品の再映画化が各社で盛んになるが、これはそのなかでも、1920 年代から 1930 年代に「メロドラマ」「新派悲劇」「女性映画」と呼ばれていた映画を再映画化した際に「メロドラマ」と宣伝・批評された作品群を指す。

この三つのジャンルにかんして、ジャンルの映画史的位置や歴史的コンテキスト、受容の過程や作品の傾向等について、それぞれ一章を設けて概説的に論じた。このとき、すれ違い映画においては、敗戦後の日本における帝国主義への郷愁や、芸術と大衆をめぐる批評的論争が重要な論点となった。また、文芸メロドラマにおいて鍵となるのは、同時代における姦通を主題とした中間小説との関係と、作品に対するモラル・パニック的な男性批評家たちの反応であった。リバイバル・メロドラマにおいては、物語世界以外の情報を搾取することによって成り立つ鑑賞の態度、具体的にはテキスト上でゴシップ的な快樂がいかに追求されようとしていたのかが問題となった。

さらに各ジャンルのなかから、地域言語的な「メロドラマ」の形態を持ちながら、よりグローバルなメロドラマ研究における主題や様式と関連性を持つ範例的作品を一つずつ抽出し、ケース・スタディとして、その作品分析を行う一章をそれぞれ設けた。すれ違い映画からは『君の名は』三部作（1953 年～1954 年）を、文芸メロドラマからは『猟銃』（1961 年）を、リバイバル・メロドラマからは『続・愛染かつら』（1962 年）を取り上げる。各作品を分析する際に鍵としたのは、これらの映画のなかでメロドラマ的葛藤を構成していたものが何であったか、という共通の問いであった。すなわち、『君の名は』のなかで、宙吊りや、マゾヒズム、逆説というつねに倒錯した様態であられるそれは、敗戦後の日本国民のメンタリティーと結びついていた。『猟銃』においてきわめ

て洗練されたスタイルを通じて示されるそれは、性と権力をめぐるジェンダー・イデオロギーに対する女性的身体の抵抗をあらわしている。そして、『続・愛染かつら』においては、このような葛藤は、物語のなかではヒロインのアイデンティティをめぐる虚と実の拮抗というかたちをとりつつ、ジャンルそれ自体にたいする自己言及的な態度を外面化させていたのである。

結論では、「メロドラマ」映画の「身体性」について三つの視点から総括的な考察を加えた。すなわち、第一に、スタジオ・システムのなかで構築され、大衆に広く浸透することで、ひとつの「からだ」としてのまとまりを持っていたこのジャンルの有り様（ジャンル・ボディー）について、第二に古典的で通俗的だという批判を免れなかった各作品のなかでそのような物語にあらがう存在でありえた俳優の生身の身体について、そして第三には、1950年代から1960年代の間に生まれたこれらのメロドラマのジャンル映画が、どのようなテクスチャーと肌理を持っているかについて、メロドラマというジャンルが持つ歴史的特殊性と普遍性の問題をあらためて問い直しつつ議論した。

最終的には、従来のフィルム・スタディーズや日本映画にかんする批評言説の「メロドラマ」に対する態度を批判的に省みつつ、今後の映画ジャンル研究が、本論文で扱ったようなローカルな形態としてのメロドラマをいっそう追求していくことの意義を訴えて、論を閉じた。